

# ぶながやで村おこし

宮城 弘

Hiroshi Miyagi  
大宜味村役場企画財政課 参事

## 1. はじめに

大宜味村は、1998年に村政施行90周年記念事業の一環として「ぶながや」を村起こしに登場させた。「ぶながや」とは沖縄で一般的に呼称されているキジムナーのことを大宜味村では「ぶながや」といっている。髪の毛がふり乱れている様子を方言で「ぶながっている」という。そこからその名前がついたようである。ぶながやは、身長1メートル足らずで、肌は赤子のように全身が赤く、顔や体全体がまさしくETのようであると故山城善光氏(ぶながや研究者)はいい切っている。多くの村民もそのようであると信じているし、私もそう信じている。ぶながやの住み家は奥深い山の中では決してない。民家のガジュマルや福木等で、人間を身近に感じながら住んでいるようである。好物はシイガイ(主食ともいわれている)やエビ等で、火を自由にあやつることができる。いたずら好きで、食事として準備してあったご飯やいもなどを腐らせたり悪さをする。(実は、暑い夏、物が腐れ易くなったことをぶながやのせいにした)相撲をとるのが好きである、人の加勢をする、大きな音はきらいである等の特徴がある。

## 2. 村起こしの背景

大宜味村では、戦後間もない頃まで多くの人達がぶながやを見たと言っている。実際に見たという人がいる限りぶながやは実存するものだと信じるしかない。ぶながや談義は巷で日常的に行われていて身近な存在である。

旧暦8月9日～11日にかけてぶながやが里に降りて来るとされ、それを見るために小高い丘にヤードゥイ(小屋)をつくってこもったり、大きな木に



写真-1 ぶながやをあしらった道の駅おおぎみの看板

ヤングワー(架け小屋)を造り親子でぶながやの出現を待ちわびた。その風習を「アラミ」と呼んでいる。ぶながやが出現するという山や川や田圃を見つめその出現を待ちわびた。ミーツァー(いねむりをふせぐためのおやつ)を持ち込んでの事なのでそこにはゆったりとした時間が流れ、親子の対話がしっかりとれた。家族にとってはコミュニケーションを深める場であり、子供達にとっては山や川や田圃をじっくり眺めることによって地域や生活環境を知る機会であり学習の場であった。

地域によっては、ぶながやホイホイといって、集落内のガジュマルやフクギの大樹にひそんでいるぶながやを追い出そうと爆竹を鳴らしたり手造りの剣(ユウナの木で造る)をふり回したりして深夜まで

遊んだようで、こうしてぶながやは地域の生活の中にしっかりとけこんでいた。

又、昭和28年に作家の火野葦平先生が喜如嘉のぶながやを取材し全国的に知らせたこと、船越義彰先生の「キジムナー物語」ではキジムナーを喜如嘉に疎開させたこと、「ゲゲゲの鬼太郎」などの怪奇漫画家の水木しげる先生は「私は天皇に直訴してでも大宜味村にぶながやの保護地区を作りますヨ」といっておられたこと等、新聞やテレビ、マスコミ等で大宜味村のぶながやが絶えず取り上げられ、すでに市民権を得ていることが村起こしの背景になっている。

### 3. きっかけ

昭和二十年代沖縄全島が電化となり、それに伴って闇の世界がなくなり、いつしかぶながやは姿を見せなくなった。しかし、ぶながやは村民の意識の中に根強く残っていた。

ぶながやで村起こしが出来ないだろうか、とこの特異な資源ぶながやで村起こしの声が村民からおこり、村政施行90周年記念事業に取り入れることになった。おりしも、時はやんばるに普天間基地移設の問題で話題となっていた。一坪の軍事基地をもたない本村に取っては平和の象徴としてぶながやを売り込むチャンスでもあった。本村は87%もの山林を有し、豊かな自然に恵まれている。豊かな自然だけでなく、心優しい人々が住んでいる大宜味村のイメージづくりをぶながやに託した。

### 4. 記念事業

村政施行90周年を迎える大きな節目に、本村の特異な資源ぶながやを村のシンボルとして登場させ緑豊かな自然と平和な村、長寿の村をアピールし村起こしの一環として次のような事業が進められた。

#### (1) ぶながやのキャラクター化

ぶながやのキャラクターデザインを全県的に募集し村起こしのキーワードにする。

#### (2) ぶながやのラベル作戦

採用されたぶながやのキャラクターは村の象徴的存在マスコットとして各種看板や名刺、印刷物などに積極的に活用し全県的に知名度を広げていく。

#### (3) ぶながやの里宣言

都会の騒音からののがれ、緑豊かな大宜味村の森で静かに種の保存を続けているぶながやの棲息

地大宜味村を、世界へ反戦平和と自然との共生を呼び掛け村民の決意をアピールする。

#### (4) フォーラム

特異な資源としてのぶながやの存在を豊かな自然と平和の象徴として守り人情豊かな人づくりで、村民性大宜味ビレー(社交性に富む)を誇りにし、あらゆる分野で活躍することを期待する。

#### (5) ぶながや商品の開発と販売

ぶながやキャラクターをもとに、窯元や農家の協力を得て、陶器の置物やぶながや人形、せんべいなどのグッズを開発し全県下で土産品として販売する。

### 5. 成果

前述の事業を進めて来た結果、反響は大きい。先ず、保育所児の心の中にぶながやが住みついたこと。子供達はぶながやの衣装を身につけたとたんぶながやになりきる。ぶながや太鼓は、今や村のPRにかかせない存在となった。



写真 - 2 ぶながや太鼓を演じる子どもたち

又、児童生徒を対象とした絵本や本が出版され、平和のシンボルとして描かれ、舞台でのイメージづくり等色々な形でぶながやが登場するようになった。更に、大宜味村の自然を求めて来訪者が増えた



写真 - 3 泡盛地酒「ぶながや」

こと。地酒泡盛に「ぶながや」を商標に用いたところたちまち酒造所の主銘柄になったこと。焼物や、Tシャツ等土産品が生まれたことが成果となって現われてきた。

## 6. 村おこし拠点としての“道の駅おおぎみ”

平成11年11月のオープン以来、村の物産や交通・観光情報の拠点として、県内の来訪者や観光客に人気を博しているのが国道58号沿いの“道の駅おおぎみ”である。施設の真ん前には、ぶながやのイラストや人形をあしらった大きな“道の駅おおぎみ”の看板が道行く人の目を止めており、村への来訪者へ「ぶながやの里」をビジュアルにアピールしている（写真-1）。また、裏手東側のネクマチヂ岳山腹には自然環境にロマン織り成す“ぶながや道”も整備され、エコロマンともいうべき時代的ニーズに対応した“ぶながやの里”をイメージづけている。

東シナ海を眺望しながら西海岸国道を北に向かうヤンバル路。風光明媚な景観を味わいながら、来訪者はやがてロマンと長寿（健康）の世界と出逢うのである。そんなふれあいの輪が咲く、村おこしの拠

点空間として“道の駅おおぎみ”を今後も機能充実させていきたい。

## 7. ぶながやからのメッセージ

沖縄で昼と夜の間をアコクローといっているが、夕陽が地平線に沈み、陽の光が余韻を残すその僅かな時間帯、ぶながやはその時間帯を好むようである。森と人家との間で暮らしているぶながやは人間と宇宙人との間の動物ではないだろうか。この曖昧な時間や、空間や場所、境界線等は何かすごく人を魅きつけるものがある。海と陸との間の渚には世界中の人々が憩いを求めて生活しているし、クサテの森は神様が天から降りてくる場所であり、ニライカナイは天と海の間であり、多くの幸福をもたらす場所である。国境や分水嶺や、亜熱帯地域や青春時代等々、この僅かな「場所」や「空間」は万物の「要」ではないだろうか、ぶながやが教えてくれたこの曖昧な世界にはまだまだ多くの村起こしのヒントがかくされているようで、ぶながやと共生して行く中からじっくりと村づくりをしていきたいと考えている。

### ぶながやの里宣言

私たちの大宜味村の森や川には、今ではここにしか生息しなくなった「ぶながや」が棲んでいる。「ぶながや」は、平和と自然を愛し、森や川の恵みを巧みに利用し、時折私たちにその姿を見せてくれる不思議な生き物である。

第二次世界大戦以前は、沖縄のほとんどの村々で暮らしていた「ぶながや」たちは、激しい戦禍と基地被害、戦後復興の近代化に耐えきれず、かつてふるさとを離れ、二十世紀最後の安住の地を求めて、豊かな自然と人々の肝清らさにひかれ、大宜味村に命を永らえるようになったという、希少種族である。

私たち村民はこれまで、戦争につながる一切を認めずにくらしてきた。それが平和な国際社会を築くことに大きく貢献していることにいささかの誇りを持ち、その気持を二十一世紀に向け、内外に発信したいと考えている。それは、「ぶながや」たちが、私たちに語ること無く教えてくれたことだと気づくようになった。私たち村民は、村政施行九十周年にあたり、「ぶながや」たちと生きてきたことに誇りを持ち、これからもこの大宜味村の豊かな自然のなかで共生し、平和で文化の薫り高い豊かなむらづくりに取り組むことを決意し、ここに「ぶながやの里」を宣言する。

一九九八年七月二十四日 沖縄県大宜味村

#### “ぶながやの里”交通ガイド

マイカー又はレンタカー利用の場合

那覇市から北へ87km、国道58号を通過して約120分。高速利用で約90分。

バス利用の場合

那覇市から名護市まで20番系統名護西線で約2時間。名護バスターミナルから根路銘バス停（最寄り）まで67番系統辺土名線で約45分。（沖縄バス、琉球バス）